

# 校長先生の初恋物語

## 第20話 とっくんVS足長君 決着の時

ボールは、まっすぐ向かってきました。おそろしいボールでした。でも、とっくんは、にげません。足長君の、あんなかっこいいみたいどを見た後に、にげるなんてできません。とっくんは、勇気を出して、ボールに向かっていきました。

「バシッ。」

ボールはとっくんのおなかに当たりました。ボールが当たったおなかは、はれつてしまふたのではと思ってしまうくらいいたかったです。胃ぶくろやしんぞうは、口からとび出しそうでした。そして、ボールは・・・。

なんと、あります。ボールは、地面にころがってはいません。ボールはとっくんの手の中に、しっかりとありました。とっくんは、足長君の本気で投げたボールをキャッチできたのです。

「すごいだちょー。とっくん、足長君の本気ボール、とっちゃっただちょー。」

きんに君が大よろこびしていました。ダンプさんは、

「とっくん、大好きーー。」  
とさけんでいました。よしこさんだって、

「とっくん、かっこいいーー。」

足長君は、おどろいていました。口は、ポカーンと開いていました。まさかとっくんが、本気で投げたボールをキャッチできるなんて、思っていなかったのでしょう。投げ終えたポーズのまま固っていました。チャンスです。足長君をぶち当てる大チャンスです。

「次は、とっくんの番だチョー。足長君を当てちゃえーっ。あちよーっ。」

きんに君の言葉に、とっくんは力強くうなづき、ボールを持ったまま、足長君に向かっていきました。

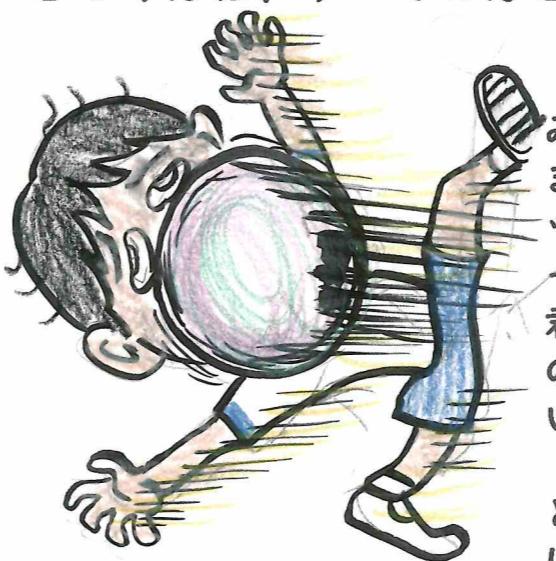


「いくぞ。足長君。今度はぼくの番だ・・・・。」

足長君は、ようやく我に返り、はっとして、あわてて後ろに下がっていました。こんなにあわてながらにげていく足長君も、見たことがありません。そのあわてっぷりに、とっくんは、「勝てるっ。」と確信しました。

「ウォリヤー————。」

とっくんは、すべての力をボールに込めて、投げました。



勝負は終わりました。昼休みが終わり、みんな校舎にもどりました。でも、とっくんと足長君は、ドッジボールのコートの中にいました。とっくんは、鼻血を出していました。足長君はその横で、とっくんの鼻血が止まるのを待っていました。足長君が言いました。

「やっぱり俺の勝ちだったな。」

とっくんの投げた「たましいのボール」は、足長君があっさりキャッチして、そしてそのあと投げた足長君の、さらにパ

ワーアップした「スーパー本気ボール」は、とっくんの顔面にちょくげきして、とっくんは鼻血ぶーでした。くやしいことに、とっくんの完敗です。足長君はそのあと、こんなことを続けて言いました。

「でも、オレが本気で投げたボールをとったのは、とっくんが初めてだよ。とっくんも、やるじゃん。」

その言葉に、なみだが出るほどうれしくなりました。「足長君って、いい人だったんだなあ。どうして今まで気づかなかつたのかなあ。」足長君と友達になったのは、そのしゅんかんでした。

「足長君、次はぼくが、当ててやるよ。」  
とっくんはかっこつけて言いました。そのまま空を見ました。UFOが飛んでいました。  
つづく

次回予告

恐怖のほらあな

